

第12回(令和5年度)「名古屋大学水田賞」講評

南森 茂太 『神田孝平の政治・経済思想における「民」』 講評

神田孝平は、福沢諭吉と時代を共有した洋学者であり、「異色の官僚」としても活躍したが、その思想については十分には明らかにされてこなかった。本研究は思想史研究のこの空白を埋める画期的な成果である。受賞者は、官僚としての神田の主な業績を政治体制および政策論の展開として克明に追跡し、それを洋学者としての業績に関連付け分析し、神田の政治・経済思想の全体像を描くことに成功した。そして、徳富蘇峰の「平民主義」の先駆という日本思想史上における神田の位置づけも提起したのである。

本研究が神田の思想の全体像に迫りえたのは、民衆像への着目という方法意識を通してであった。幕末および明治初期の思想家においては、民衆を「愚民」と観念することが福沢諭吉をはじめとして大勢である中で、神田は民衆を「人民」と呼び、「民衆が政治や経済の担い手である」と考えていた。本研究は、このような神田の民衆観の独自性に着目し、その「人民」像の変遷を軸に、神田の政治・経済思想の成立と展開を捉えた。

具体的には、『農商弁』(1862年)をはじめに、幕末から明治初期特に兵庫県政での活動時期に至る神田の建議書や論文、さらには、『明六雑誌』寄稿の論文(「貨幣四緑」明治7・8年)を幅広く検討・分析し、神田の政治・経済思想が、民衆を「自立した経済活動の担い手」と把握することを基本に据えていたことを示した。そして、神田の思想は、福沢などの同時代の思想家の共有した「愚民」観に対抗し、後の徳富蘇峰の「平民主義」の先駆という位置を日本思想史においてもつとしたのである。

本研究は、神田孝平の再評価に加え、その民衆像の特質と意義を問題提起したことによって、近代日本思想史研究の発展に大きく貢献するだろう。ただし、本研究の現状では、民衆像に関して、福沢の「愚民」と神田の「人民」との抽象的対立の強調に終わっていると言わざるを得ない。しかし、福沢が民衆を「愚民」と表現したのは、将来の自立した民衆の出現の基体を求めていることであり、民衆の主体性を全否定したわけではなかった。したがって、福沢の「愚民」観と神田の「人民」観との対比を、より複合的な緊張関係において再考察していく必要があるし、明治期思想全体における民衆像についても、さらに深い思想的検証の可能性が残されているのである。民衆思想史の成果との研究連携も不可欠である。本研究が思想史研究の発展に寄与していくことを期待する。